

今日は I 列王記21章から「真の悔い改め」と題して2つの点でみことばを取り次ぎます。

1. しもべとしての生き方

1-4【1 これらのことがあった後のことである。イズレエル人ナボテはイズレエルにぶどう畑を持っていた。それはサマリアの王アハブの宮殿のそばにあった。2 アハブはナボテに次のように頼んだ。「おまえのぶどう畑を私に譲ってもらいたい。あれは私の宮殿のすぐ隣にあるので、私の野菜畑にしたいのだが。その代わりに、あれよりもっと良いぶどう畑を与えよう。もしおまえが良いと思うなら、それ相当の代価を銀で支払おう。」ナボテはアハブに言った。「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲るなど、主に掛けてあり得ないことです。」4 アハブは不機嫌になり、激しく怒って自分の宮殿に入った。イズレエル人ナボテが彼に「私の先祖のゆずりの地はあなたに譲れません」と言ったからである。アハブは寝台に横になり、顔を背けて食事もしようとしなかった。】

これらのことがあった後とは、20 章のイスラエルがアラムに勝った時、アハブ王がアラムの王ベン・ハダドと契約を結んで逃がしてしまったことです。その時、預言者がアハブに神のさばきを伝えると、アハブは不機嫌になり激しく怒って宮殿に戻って行きました。その後の出来事です。アハブはサマリアのほかにはイスラエルの北に位置するイズレエルにも宮殿を持っていました。その宮殿のそばにナボテが所有するぶどう畑がありました。アハブはそのぶどう畑を自分の野菜畑にしたいと思い、アハブに譲ってほしいと願いました。そして譲ってくれるなら、ここよりも良いぶどう畑を与えるし、あるいは土地代を支払うと伝えました。

するとナボテは「私の先祖のゆずりの地をあなたに譲るなど、主に掛けてあり得ないことです」と言って、王の申し出を断ったのです。これには理由がありました。それは律法には、神から与えられた先祖の譲りの地を売ってはならないこと、貧しくなりどうしても売らなければならない場合にも買戻しの権利を付けて、やがて買い戻すことが記されているからです。ナボテは神のことばに従ったのです。それを聞いたアハブは不機嫌になり、激しく怒って宮殿に戻りました。そして寝台に横になり、顔を背けて食事もしませんでした。アハブは自分の気に食わないことが起こると、すぐにふてくされる人でした。

5-7【5 彼の妻イゼベルは彼のもとに来て言った。「どうしてそんなに不機嫌で、食事もなさらないのですか。」6 そこで、アハブは彼女に言った。「私がイズレエル人ナボテに『金を払うから、おまえのぶどう畑を譲ってほしい。あるいは、おまえが望むなら、代わりのぶどう畑をやってもよい』と言ったのに、彼は『私のぶどう畑はあなたに譲れません』と答えたからだ。」7 妻イゼベルは彼に言った。「今、あなたはイスラエルの王権を得ています。さあ、起きて食事をし、元気を出してください。この私がイズレエル人ナボテのぶどう畑を、あなたのために手に入れてあげましょう。】

アハブの妻イゼベルが彼の所に来て、どうしてそんなに不機嫌なのかと尋ねました。アハブはナボテに「代金を払うか、代わりの良いぶどう畑を与えるから、あなたのぶどう畑を譲ってほしい」と願ったが、断られたことを伝えました。イゼベルはそのような王の態度を理解できません。なぜなら、彼女の出身地シドンや他の国の王は独裁者であり、王の権威をもって自分の願いどおり何でもできるからです。それなのに、ぶどう園の一つも自分のものにできないと嘆くアハブを理解できませんでした。そこで「私に任せておきなさい、ナボテのぶどう畑を手に入れるから元氣を出しなさい」と夫に言いました。

8-10【8 彼女はアハブの名で手紙を書き、彼の印で封印し、ナボテの町に住む長老たちとおもだった人々にその手紙を送った。9 彼女は手紙にこう書いた。「断食を布告し、ナボテを民の前に引き出して座らせ、10 彼の前に二人のよこしまな者を座らせて、彼らに『おまえは神と王を呪った』と証言させなさい。そして、彼を外に引き出し、石打ちにして殺しなさい。】

イゼベルは、アハブの名で手紙を書き、彼の印で封印し、ナボテの町に住む長老たちと主だった人々に送りました。内容は、断食の布告によって、非常に重い罪があったことを人々に知らせる、ナボテを裁判の場に連れて来る、二人のよこしまな者にナボテが「神と王を呪った」と偽りの証言させる、そしてその罪に対してナボテを石打ちにして殺すというものです。これらの命令は律法の教えをうまく使っています。イゼベルはナボテが律法違反の罪を犯したとして死刑にしようとしたのです。

11-14【11 そこで、その町の人々、その町に住んでいる長老たちとおもだった人々は、イゼベルが彼らに言ってよこしたとおり、彼女が手紙に書き送ったとおりに行った。12 彼らは断食を布告し、ナボテを民の前に引き出して座らせた。13 そこに、二人のよこしまな者が入って来て、彼の前に座った。よこしまな者たちは民の前で、「ナボテは神と王を呪った」と証言した。そこで人々は彼を町の外に引き出し、石打ちにして殺した。14 こうして、彼らはイゼベルに「ナボテは石打ちにされて死にました」と言ってよこした。】

イズレエルの人たちは、ナボテが善良な人であることを知っていたのではないのでしょうか。彼がアハブに「主に掛けてあり得ない」と言った時、彼は主を信じる者であることを伝えたのです。彼は神がイスラエルに 7 千人のバアルに膝をかがめない人がいると言われた 7 千人の一人でした。しかしイズレエルの人たちは、イゼベルを恐れました。イゼベルの言うことを聞かなければ、自分たちが殺されるのではないかと思ったのです。そこで、イゼベルの言うとおりに、2 人のよこしまな者に偽証させ、ナボテを石打の刑にして殺しました。そしてナボテが死んだことをイゼベルに伝えました。

15-16【15 イゼベルはナボテが石打ちにされて殺されたことを聞くとすぐ、アハブに言った。「起きて、イズレエル人ナボテが代金と引き替えで譲ることを拒んだ、あのぶどう畑を取り上げなさい。もうナボテは生きていません。死んだのです。」16 アハブはナボテが死んだと聞いてすぐ、立って、イズレエル人ナボテのぶどう畑を取り上げようと下って行った。】イゼベルはナボテが死んだことを聞くと、すぐにアハブにそのことを伝え、ナボテのぶどう畑を取り上げなさいと言いました。アハブはそれじゃあということで、ナボテのぶどう畑を取り上げるために向かいました。

第 1 の点で覚えたいことは、イスラエルの王としての生き方です。申命記 17:18－20 には、王は一生の間律法を読み、主を恐れ、主のことばを守り、民の前で高ぶることなく、主の命令からそれることなく、イスラエルを治めることが記されています。これは、偶像を礼拝する周りの国の王とは全く違う生き方です。イゼベルの出身地シドンでは王はバアルの神を礼拝こそすれ、王が最高の権威を持ち、独裁者として民を支配し、自分の願うことは何でもできたのです。ですから、イゼベルは、シドンの王のようにふるまって、王の権威を見せつけたのでした。しかし、イスラエルでは神が真の王であり、地上の王は神から王としての地位と権威をゆだねられているのです。ですから地上の王は真の王である神に従い、神の命令に従い、民の前に高ぶることなく、謙遜になって、民の幸福と平和のために働かなければならないのです。アハブが強制的にナボテの畑を取り上げなかったのも、イスラエルでは王であつ

でも律法に逆らうことができないことを、ある程度知っていたからではないでしょうか。

このことは新約聖書のイエスの教えに通じます。イエスはマタイ 20:25-28 でこう言われました。【あなたがたも知っているとおり、異邦人の支配者達は人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に立って権力をふるっています。あなたがたの間ではそうであってはなりません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、皆に仕える者になりなさい。あなたがたの間で先頭に立ちたいと思う者は、皆のしもべとなりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのと、同じようにしなさい。】王の王であるイエスがしもべとなって仕えるために来られ、最後には私たちを救うために、贖いの代価として自分のいのちを与えてくださいました。ですから、私たちが王の王なるイエスのしもべとして、人々の前に高ぶることなく謙遜に仕える者として歩むことが、神のみこころであることを覚えましょう。

2. 真の悔い改め

17-19【17 そのとき、ティシュベ人エリヤに次のような主のことばがあった。18「さあ、サマリアにいるイスラエルの王アハブに会いに下って行け。今、彼はナボテのぶどう畑を取り上げようと、そこに下って来ている。19 彼にこう言え。『主はこう言われる。あなたは人殺しをしたうえに、奪い取ったのか。』また、彼に言え。『主はこう言われる。犬たちがナボテの血をなめた、その場所で、その犬たちがあなたの血をなめる。』】神はこの出来事のすべてを見ておられました。そして神はエリヤに対して、アハブに会ってナボテを殺して、ぶどう畑を取った罪のために、犬がナボテの血をなめたように、お前の血をなめると伝えよと言われました。このことは22章のアハブの死の時に成就します。

20-25【20 アハブがエリヤに「おまえは私を見つけたのか、わが敵よ」と言うと、エリヤは答えた。「そうだ。あなたが主の目に悪であることを行うことに身を任せたので、見つけたのだ。21『今わたしは、あなたにわざわいをもたらす。わたしはあなたの子孫を除き去り、イスラエルの中の、アハブに属する小童から奴隷や自由の者に至るまで絶ち滅ぼし、22 あなたの家をネバテの子ヤロブアムの家のようにし、アヒヤの子バアシャの家のようにする。それは、あなたが引き起こしたわたしの怒りのゆえであり、あなたがイスラエルに罪を犯させたためだ。』

アハブがエリヤと会ったとき、「おまえは私を見つけたのか、わが敵よ」と言いました。アハブがエリヤを敵と言うことは、エリヤを遣わした神に敵対しているということです。エリヤはアハブに対して神のさばきを伝えました。それはヤロブアム家とバアシャ家が滅ぼされたように、あなたの家も神のさばきを受けて完全に滅ぼされるということです。

23-26【23 また、イゼベルについても主はこう言われる。『犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らう。24 アハブに属する者で、町で死ぬ者は犬がこれを食らい、野で死ぬ者は空の鳥がこれを食らう。』】イゼベルはバアル礼拝を持ち込み、この時も偽りの証言をさせてナボテを殺しました。神は犬がイズレエルの領地でイゼベルを食らうと言われました。このことはⅡ列王記9章で成就します。さらにアハブ家に属する者がみな滅ぼされることを神は告げられます。

25-26【25 アハブのように、自らを裏切って主の目に悪であることを行った者は、だれもいなかった。彼の妻イゼベルが彼をそそのかしたのである。26 彼は、主がイスラエル人の前から追い払われたアモリ人がしたのと全く同じように、偶像につき従い、非常に忌まわしいことを行った。】アハブはイスラエル史上最悪の王でした。その背後にはイゼベルがいて彼をそそのかしたのです。イゼベルの影響力は非常に大きく、アハブはイゼベルの言うとおりに、バアル礼拝をイスラエルに広めました。

27-29【27 アハブはこれらのことばを聞くとすぐ、自分の外套を裂き、身に粗布をまとい断食をした。彼は粗布をまとい伏し、打ちひしがれて歩いた。28 そのとき、ティシュベ人エリヤに次のような主のことばがあった。29「あなたは、アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。彼がわたしの前にへりくだっているのだから、彼の生きている間はわざわいを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわいを下す。』

意外や意外、アハブはエリヤの言葉を聞くと、神の前にへりくだり、悔い改めの姿勢を取ったのです。これを見た神は、エリヤに対して、「アハブが神の前にへりくだっているのだから、彼の生きている間は災いを下さない。しかし彼の子の時代に災いを下す」と言われました。哀れみ深い神は、アハブが悔いた心をもってへりくだった姿を見られ、神のさばきを先送りすることを伝えました。しかし、これは一時的な延期であって、神のさばきはアハブの孫のヨラムの時に起こりました。アハブの悔い改めは、残念ながら一時的なものでした。その証拠に、アハブはその後も主を信じることなく歩み続けました。それに対してダビデは真の悔い改めをして、神に罪を赦され、その後も主に従って歩み続けました。

神は私たちにも一時的、表面的な悔い改めではなく、真の悔い改めを求めておられます。真の悔い改めはイエスを自分の救い主と信じる信仰につながります。パウロは使徒20:21で「ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証してきたのです」と言いました。神に対する悔い改めと主イエスに対する信仰を持てば、私たちは救われるのです。悔い改めとは方向転換のことです。今まで私たちを造り、生かしておられるまことの神に背を向けて、自分勝手に生きてきた罪を悔い改め、方向転換して神に向きを変えるのです。その時、今まで犯してきた個々の罪も神に告白して、神の赦しを求めます。次に主イエスに対する信仰を持ちます。イエスは私たちのすべての罪を十字架で負い、私たちの身代わりに神のさばきを受けてくださいました。そして、三日目によみがえり、天に昇り、今も生きておられて、御自分を救い主と信じる者のすべての罪を赦し、きよめてくださいます。そのイエスを「私の救い主」と信じるのです。そしてイエスのしもべとして生きていくことを公に示す洗礼を受け、まことの神と主イエスを信じるクリスチャンとして歩み出すのです。これが真の悔い改めの第一歩です。

旧約時代は救い主イエスはまだ来られていません。旧約時代の真の悔い改めは、偶像から離れ、まことの主なる神のみを信じ、律法に従っていきることです。そして、律法が教えるとおりに、自分の罪を贖うために、悔い改めの心をもって動物のいけにえをささげ、罪の赦しをいただくことでした。旧約の動物のいけにえは、やがて来られる救い主イエスを預言していたのです。

私たちはクリスチャンになっても、罪を犯すことがあります。その時は、神の前に自分の罪を悔い改め、救い主イエスの十字架の贖いを信じ、罪が赦されたことを感謝して、神に従って生きるのです。これがクリスチャンにとっての継続的な真の悔い改めです。真の悔い改めは、地上で生きる限り続きます。私たちが神に悔い改める時、神との深い交わりに生きることができるのです。私たちはイエスのようにしもべとなって、皆に仕える者となり、いつも真の悔い改めをもって歩んでいきましょう。